

ケース3： ゼロからイチにするのが苦手です！

という学習者に

どのような足場かけ(Scaffolding)をしますか

＊グループワークの場面で

担当：

植村 麻紀子（神田外語大学）

あゆみさんの背景と特性

- ・ あゆみさんは脳性麻痺による肢体不自由で車椅子生活。
- ・ 小中高は特別支援学校。個別に配慮された学習環境。
- ・ 韓国ドラマに影響を受け、独学で韓国語学習を開始。
- ・ 視覚情報処理や情報整理が苦手で、見通しの立たない課題に強い不安。
- ・ 大学では黒板の撮影許可など合理的配慮を受けている。
- ・ 「ゼロからイチ」にするのが苦手だと自覚している。

本人および教師の困りごと

- ・授業では「韓国に関することを調べて発表」という課題が出された（グループワーク）。
- ・あゆみさんは真面目でコミュニケーション能力もあるが、あゆみさんのグループは何から始めたらよいか分からず。
- ・母親の助けもあり、テーマ設定、分担、構成ができ、結果的には良い発表ができた。
- ・「テンプレートがあると始めやすく、1から10は得意」との本人の言葉。
- ・教師は「ゼロから考えるのが勉強」と感じており、足場かけをどこまですべきかに悩む。

支援のあり方をめぐって

- ・ 支援学校では、教師が個々の特性に合わせて支援していた。
- ・ 大学では、合理的配慮はあるが、課題の進め方は学生に委ねられる。
- ・ あゆみさんの母親は「支援学校の先生は『はじめての一步』を支援してくれていた」と語る。
- ・ 田中先生は「0から1を生み出すことこそが学習」と考えている。
- ・ 支援すべきか、見守るべきか、教師の中でも意見が分かれている。

いろいろな声①（あゆみさん／田中先生）

■ あゆみさん

- ・ 大学では授業で分からない点を整理し、個別指導も受けている。
- ・ サポートに感謝しているが、「一人で何から始めていいか分からない」と感じることも多い。

■ 田中先生

- ・ 「0から1」が苦手というが、そこを考えるのが勉強では？
- ・ あゆみさんは熱心で協調性がある学生。母親の手伝いではなく、クラスメートとの対話で解決できなかったのか気になっている。



いろいろな声②（花山先生／水川さん）

■ 花山先生

- ・ 課題には工程例や過去作品、ループリックを提示すべき。そういった足場かけは必要な支援。

- ・ AIとの対話で支援の一部を担う可能性も示唆。

■ 水川さん（職員）

- ・ ASD傾向の学生に関する知識や支援経験がある。

- ・ 学生に丸投げではなく、教師や職員が適切に足場をかけるべきと主張。

- ・ 特性に関する理解が教員・学生の両方に必要と訴える。



ケースを考える：個人レベルの問い

Q1：あなた自身、「何から手をつけてよいかわからない」と感じた経験はありますか。

Q2：田中先生と花山先生の教育観について、どのように考えますか。教師がまず何らかの「足場かけ」をするのか、学習者同士が相互に補い合うことをまずは黙って見ているべきなのか。

Q3：課題と情報のリンクがうまくいかなかったり、情報処理とそのまとめが苦手な学習者がいます。課題の出し方や情報提供の工夫として、どんな支援ができると思いますか。

ケースを考える：学習空間レベル

Q1：ゼロからイチにするのが苦手な学生がいる場合、ペアワークやグループワーク時にどんな配慮が必要ですか。

Q2：どのような点を意識して一緒に活動するよう、学生たちに声かけしたらよいでしょうか。

Q3：特別支援学校などから進学してくる学生への対応として、大学は（教員として/職員として）どのような事前準備が必要でしょうか。

ケースを考える：社会レベル

Q1：教室に限らず私たちの周りには、困難なことが目に見える人と、見えにくい困難を抱えている人がいます。どのように気づき、支援しますか。

Q2：「合理的配慮」と「足場かけ」は違いますが、学習支援という観点から、教師が言語学習においてできること、やるべきことは何でしょう。

Q3：AIや個別最適化学習の時代において、「足場かけ」の意義や方法はどう変化すると思いますか。

ディスカッション：このケースにどう対応するか？

これまでの問いや事例をふまえて、次の点について考えてみましょう：

- ・ 田中先生は、あゆみさんの「ゼロからイチが苦手」という相談をどう受け止めるべきか。
- ・ グループワークや発表課題で、どのような足場かけが可能か。
- ・ 教師として、他の学生や支援者とどう連携し、どこまで支援すべきか。